
魔方陣（ほし）に願いを

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔方陣ほしに願いを

【Nコード】
N7310Y

【作者名】
青い絵 八代

【あらすじ】
千年のときを越えて、現代に降り立つ魔法使い。黒き闇の中、最初の魔方陣を描く。そう、とても優雅に。

しかし、優雅すぎたのか、桃野マリモという能天気少女が偶然通りかかった。いきなりのトラブルに、戸惑う僕こと、ファウンは。それにしても、マリモは勘がよすぎで…正体がばれる。

第一話 星の魔方陣（前書き）

魔方陣だ、魔法だ、超魔法だ。

第一話 星の魔方陣

僕は、現世に来た。

千年の時を越え、ついに来た。

僕は、魔法使いだ。名前は、ファウン。ある理由があつて、この時代、2000年代に来たのだが…。

そのためには、まず世界を見渡す必要があつた。

共里越公園、午後七時。僕は、ここの地面に魔方陣を書き始める。この魔方陣は、世界を見渡すという目的で使うこともできるし、世界から何かを呼び出す目的で使うこともできる。

千年の時を超えているので、やたらと見慣れないものが多い。

しかし、次第に分かつてくる。

やはり、この世界には無くさなければいけないものがいくつあった。

それは、この世界にある間違いの一つ、不平等と言うものである。要するに、言ってしまうえば、世直しのためにこの時代に来たのだ。

まあ、こういう行動も非難されるべきものではあるが、いろいろあつてほしい行動だ。

僕は、久しぶりに空を見上げた。

のんきとしか言いようが無いが、僕としてもこの世界が新鮮で心動かされるのだ。

ここは、東京と言う街らしい。

なんとなく、胸躍る世界だ。

おっと、そろそろ魔方陣を消さねば。

と思つてみると、そこには人が居た。

「ぐああああ、誰だ、キサマ。それを見たな！！」

「おっ、やあ。あたしは、桃野マリモ。不思議な魔方陣だね、映像

が見える」

「この秘密を知ったからには、お前の正体を暴く」

僕は、魔方陣にその女について情報を求めた。

しかし、何にも映らない。

こいつ…一体何者だ。

「もしかして、魔法使い？」

ばれた。

常識的にありえないだろ。

「そうだよ」僕ははつきり言った。「まったく、こつなったら…」

とりあえず、手駒にしておこう。

この時代に来て、早速トラブルか。

「魔法つて、どうやって使うの？」

「絶対に、教えない！！」

「ホントに魔法使いなんだね」

僕は、その少女について、地道に考えていたが。

どうやら、勘がいいようだ。

仕方ないので、魔法についてじゃなく、ここに来た理由とかについて話すことにした。

「しょうがない。僕がどういう存在かと言うと、千年前の世界から来た魔法使いだ」

「あつ、時空を越えた魔導師的な？」

「ああ、君が言うとおりだ。正直、平安の世界はつまらなくってね。一人で魔法の勉強をしていたんだ」

「でも、現代には、魔法って無いけど」

「魔女狩り…みたいなのがあってね」

「へー」

「真面目に聞いているのか」

「いや、興味が沸いてきちゃって」

「なんか、このマリモっていう奴、ポジティブだ。」

「ちなみに、僕はネガティブに近いから、こんな世直ししようとしているんだが。」

「何のために、この時代に？」

「…、話すべきだろうか。」

「これと話すと、どうしてもこの世界への干渉が公になってしまう。」

「えーっと、観光かな」僕は、ウソをついた。

「おお、うらやましい」

「良ければ、近くに宿は無いかな？」

「あー、あたしのうち旅館だよ」

「意外な展開だ。」

「冗談だろ？」

「本当だよ。良かったら来てよ。最近人が少なくなっちゃって」

「ああ、それは良かった」

「良くないよ。人が来ないんだよ。来ないってどういう意味か、分かってる？」

「売れない旅館でことだね」

仕方ないので、急いで魔法陣を消して、桃野マリモ推測16歳の家の旅館に行くことに。

なんか、嫌な予感。

…。

僕は、その後いろいろマリモの親達に挨拶し、状態を説明して、一つ部屋を借りた。

マリモは、颯爽と去っていった。マリモは高校生なので勉強があるらしい。

全く、厳しい親だ。まあ、僕にとっては、なんでもないが。

「魔方陣、完成」

僕は、星の魔方陣を書いた。

この魔方陣は、願いをこめることができる。

僕は願う。

「僕にこの世界の業を教えてください」

業…。

この言葉が、僕のここに来た訳。

そして、この業が、ふとしたことで世界をも変えてしまうことを、僕は知らなかった。

未来が、変わる可能性。

それが、存在していたのだ。

第一話 星の魔方陣（後書き）

久しぶりの投稿なので、見てもらえるといいなと思っています。
これは、どんどん続きを書いていきますので。

第二話 運命の魔方陣

魔方陣が何故存在するのか、といえば。

正確に、魔力を移すためである。

だが、その魔力と言うものが何処から来るのか。それは、人類が考えもしなかったある物体が必要であった。

『業を教えよう』

星の魔方陣が、語る。

窓から、月明かりがこぼれ、沈黙の時間が流れる。

『業とは、この先起こる災いに通じている』

そして、魔方陣は力を失った。

災い？

それは一体。

とりあえず、僕は、魔方陣を適当に描いてみることにした。

この魔方陣は、時間からエネルギーを抽出する魔方陣だ。使いすぎると、世界のバランスが崩れる。

「ねえ、ファウンさん。ご飯ですよー、早くう」

そう言ったのは、マリモだった。

僕は、仕方なく、一階に下りると…。

そこでは、歓迎会が模様されていた。

「ちょっと、どういう？」 「僕は疑問に思った。」

「あなたが、少し寂しそうだったから。あたしはパーティーを開催したのよ」

「馴れ馴れしい奴だな。僕はお前なんかとは次元が違う存在だ」

「うっ、酷い」

「くだらないことではあるが、一応楽しませてもらう。ありがたく思うがいい、はははは」

そこには、おいしそうなおでんがあった。

中はぐつぐつと、食材を温める。

僕は丁寧に、いただきますをして、お箸でそれを取った。

…

…

その頃、放置していた、時の還元型魔方陣は。

その近くに、ある女が居た。

「けっ、あいつくだらねえ事を始めようとしているみてえだな」

この魔方陣は、あいつしか知らない。平安の世では並び証されていたが、結局コイツは途端に居なくなった。あいつは、裏切り者だ。

そして、その女は、魔方陣を誤作動させるように書き直した。

さらに、魔力を注入して、発動させた。

「タイムリミットは、一ヶ月だ」

一ヶ月以上の時のエネルギーをこの世界から切り離した。

そして、空に時計が浮かんだ。

一ヶ月で一周する巨大な針時計。

そして、その女は、魔法の幕で空を飛んでいった。

…

…

「おい、ついてくるなよ。勉強はどうした！」

食事が終了し、マリモのあほがくつついてきた。

「正直、魔法が教わりたい次第です」

「こいつは、きっと病魔だ。
知らないふりをしよう。」

「わーい」

油断をしている隙に、彼女は僕の部屋に入りこんでしまった。

「おととつと」

「危ない」

マリモが、魔方陣の内側へ転びそうになった。

僕は、この時気づいた。

時の魔方陣が、書き換えられている。しかも、魔力が注入された形跡がある。

この、書き方は…僕の親友だったレイチャラー・グラムの特魂。実を言うと、魔方陣のエネルギーである魔力とは、その人間が持つ魂なのだ。それを切り離して、エネルギーにする。

そして、魔方陣が存在する理由は、少しの魂で魔力を何倍にも高める効果のため。

そう、代価は魂だ。

マリモが、今魔方陣の内へ倒れていく。

僕は、必死に止めようとした。

レイチャラー・グラムの魔方陣は、代価とする魂がかなり多い。

このままでは…。

僕は、ギリギリでマリモの手をつかみ引つ張った。

しかし、遅かった。

魔方陣は、マリモのわずかな魂の代価で動き出した。

時の消失。

僕らの世界は一瞬真っ暗になった。

しかし、世界は再び起動した。

「あ、あ、どうしたんだ」呟く、僕。

僕とマリモはさっきと同じ部屋に居た。

そして、世界も普通に動いていた。

「今、世界が崩壊しました。あなたに、助けて欲しい」

桃野マリモはさっきと違う雰囲気ですら発言した。

何かが、違う。さっきのマリモではない。

「私は、マリモの心の中で眠れる意志。先ほどの魂の置換によって、私の魂が表に出ることが可能となりました」

「くそっ、僕がいながら、まさか自滅か」

「いえ、これは必然です」

「必然？」

「あなたに、確かめて欲しい。運命の魔方陣で」

言われたとおり、僕は運命の魔方陣を地道に描いた。

そして、発動させた。

すると、空に巨大な時計が見えた。

「これは？ 何なんだ！」

「あれが、道しるべとなる。タイムリミット……。あなたは、運命に操られてしまう存在。そして、私が、あなたを変える存在なのです」
続ける、マリモ（裏）。「そう、あなたはレイチャラー・グラムの存在に気づかず、この時代に来てしまい、この最悪の未来が訪れようとしている。彼女が一体、どれほどの世界を壊してきたことか」

「つまり、あのタイムリミット以内に時間を元に戻さなくちゃならないんだな」

「ええ、しかし、これは俗に言う業が絡み合っているという、奇奇怪怪な状況なのです。ゆえに、あなたは全力でこの業の絡みを解明しなくてはならないのです。これこそ、運命からの出題。これを、解決することは、あなたの願いを叶えることにも繋がっているのです。不思議なことに」

「僕の願いは、世直しだ。言つと恥ずかしいけど」

「この業には、世界を良くする結果が伴う。あなたは、そのダブル・アンサーを見つけないしかない。それが、あなたを繋ぐ」

僕は、この地味な旅館で、のんびりと世直ししていくことを計画していたが。

ここからは、全く違うものとの戦いになることを悟った。

僕は、そのマリモの正体にはつきりと気づきつつも。

魔方阵の力が及ばない、試練に動揺しながら、そこに立ち尽くすしかなかった。

第二話 運命の魔方陣（後書き）

自信がないけど、続きを書いていきたいと思う感じですよ。気が向いたら、何度も読んで欲しい。

第三話 詳細のグラム(前書き)

これは、第二話レイチャー・グラムの詳細です。

第三話 詳細のグラム

眠い。

そう思ったのは、必然だった。

不老不死の身体とはいえ、魔方陣を発動させると幾分疲れるのだ。

ところで、不老不死になったわけは、一度死んでいるからだ。つまり、私はゾンビというわけだ。

それでも、魔法で生きている。

これといって、不便も無い。

私は、偶然例の男、ファウン。いや、(F)がここに来たことを魔方陣で知った。ファウンも千年後の世界へ来ていたということだ。

「つたく、魔法使いとしては一流だが、どこかアイツは間抜けだ」
私はこう考えている、ファウンは優しすぎるのだ。

そういう人間は、何時か失敗する。失敗しても立ち上がれない。

上空百メートルを飛んでいる。

眺めが綺麗だ。

「ファムファムファム」

そう鳴き声をあげた、ミニドラゴン。こいつは、私のペットだ。未来に居たとき、なんかついてくるのでペットにした。最初は、

巨大なドラゴンになると思って期待していたが、こいつはこれ以上成長しないようだ。

正直、呆れる。

最近では、鳴き声の意味が分かるようになってきたくらいだ。しゃべって欲しいのが本当のところだ。

「どうした、何か反応があるのか？」

「ファムファム」

あの、旅館か。

名前は、『桃野屋』で外装はちよつと古い。それにしても、あそこから魔法反応が。

一体、誰が？

「ファムファム、ファム」

えっ？ その前にこつちって？

私の魔方陣の筈は、進路を変えて、旅館の裏へ。

「あなたは…、ファウン？」

私達は着陸して、すぐにファウンに出会った。

「ファウン、久しぶりね」

なんとなく、照れながらそう言った。

そのとき、ファウンはこう言った。

『死人が、歩いてるよ。ケツケツケツ、お前はクズだ。最低な奴さ』

「仕方ないでしょ、それに最低って…」

『この世界をオレは崩壊させる。お前もそれと同時に消す。邪魔するなら殺すぜ』

「お前こそ、死ね！ 信じてたのに」

私は、そうしてその場を去ろうとしたが、その時たまたま魔方陣を見つけた。

その時、凄く悔しくて、気が動転して酷いことをした。

それが、世界を変えてしまうなんて知らなかった。知っていたけど、もうどうでもよかった。

もしかしたら、千年後の世界に来ること自体間違っていたのかもしれない。

それが、最悪の結果を生む。それに早く気づいていれば、魔方陣

なんて書かなかっただろう。この結果も、世界が決めたことかもしれないが。

私達は、どこかで道を踏み外した。

第三話 詳細のグラム（後書き）

少し、ストーリーの詳細を書いてみました。さて、本編の続きは、
また次回。

第四話 拡散の魔方陣（前書き）

第二話から

第四話 拡散の魔方陣

「あなたは、どうして…魔法で世界を変えたいの？ どうして？」

そう、夢の中で呟く誰か。

「…、誰？」

「ねえ、どうして？」

「僕は…」

僕は、その理由がなかった。結局のところ、僕のしようとしていることに本当は意味が無いのかもしれない。

「未来は、それぞれの行動の結果から作られる。そして…あなたはそれを理解していたの？」

「何が…、言いたい？」

「あなたが変えたことの中に大切なものが存在していたら…どうするの…」

「それは…」

結局、僕は間違っていたのだ。行動に正義も悪も無い。結果が残る。

その時、腹部に衝撃があった。

僕は一瞬死ぬかと思った。

…。

…。

「ぐあああああああ」

僕は、高らかに叫んだ。

「起きた？」

そこに居たのは、にっこり笑っているマリモだった。

僕はその目に殺意を感じたので二秒で起きた。

それにしても、あいかわらず世界は動いている。どうして？

その時あの言葉を思い出した。

『タイムリミットがある、それをクリアするにはあなたは正解を導かなくてはならない』

そんなことを言っていた。

ふと、気づいたがマリモの内なる性格は表に出ていないようだ。

しかし、ちよっと試すか。

「昨日、転びそうになったとき、僕は下敷きにされたんだぜ。酷いな」

「うーん、そうだった。記憶があいまいでさ」

「そうか…かなり痛かったっていうのに」

なるほど、憶えていないか。

適当にあしらうか。だが、今度の魔方陣は失敗しない。僕は、おもむろに押入れを開けた。

そこには、すでに魔方陣を書いておいた。そして、再び閉める。

「じゃあ」さらっと、僕は言った。

「つて、ご飯は？」

「五分後に行くから」

入り口を強制的に閉めて、密室状態。

そこで、また魔方陣の在る押入れを開く。

この魔方陣には、一つの物体を拡散させてあらゆるケースの対処を示す魔法がある。

おそらくこれで呪文を唱えれば、分かるだろう。

この先の出来事が。

「僕のいるこの世界が今示していることを教えてくれ」

そう言って、自らの魂を代価に払う。指から自然に魂は出る。――

般に触れば自然と魂は移るということ。魂は、常に代価として払われている、それが生きるということであるから。
ビジョンが見えた。

『世界が、終わる…』 『たった三日で？』

『僕は何をすればよかったんだ』

その言葉に、マリモ（裏）は答えた。

それは…。

『グラムの心の死…』

という言葉。

僕はその予知を聞いて、その意を悟った。

恐らく、グラムに関わらなかつた、そのせいだ…。

まだ、グラムに何が起るかを調べていないが、どこにいるかなら大体知っている。

ここに来る前から、グラムの位置は大体分かるのだ。魔法以前に、僕達は親しく繋がった仲であるから。特に深い意味はないのだが…。

僕は押入れを閉めた。

僕はふと、布団に横になった。

「何が起っているんだ…。まだ分からないことだらけだ」

静かに天井を見上げ、少し疲れを感じた。

「知らないところでいろいろなことが起っている。なんで僕はそれに気づけないんだろう」

その後、しつこくマリモが呼ぶので、渋谷食堂へ。

「ねえ、これ…何です？」

「あー、おいしそうでしょ。私がつったの」

「おいおい」

これ、泥団子じゃないか。

知能レベル低すぎだろ。

と真面目に思っ、よく見たらチョコレートの団子だった。

「なんて、泥団子っぽいチョコなんだ!!!!!!」
それにしても、朝食これだけ？」

「なあ、僕の朝食は、昨日みたいなのないの？」

「あーあーあーあ、もうない」
意味不明だ。

だが、もうここにいるだけ時間の無駄だ。マリモは天然で、この旅館の人もほとんど見てみぬふり。

呆れて物も言えない。

「とりあえず、しばらく外出するから。店番をよろしく」

「何処に行くの？」

「何度も言うが店番をよろしく」

僕は、人間転送を使った。

これは、魔方阵を体にかけておくことのできる。

すると、向かった例の場所にレイチャラー・グラム。通称レイが居たのだった。

…。

…。

「やっぱり、ここにいたね。レイ」

そこは、一面の花畑だった。

色とりどりの花が、あった。特に印象的なのがバンジーだ。レイが好きな花の一つ。

「相変わらず、花が好きだね」

そう話しかけると、レイは泣いていた。

「どうしたの？ これ…」

「え？」 驚いて振り向くレイ。

ハンカチを渡した。

「なんで、来たの？ あなたは世界を壊して自分のものにするんですよ」

…ん？ そんな設定？

僕は全く身に覚えが無いが…。

「この空気は…本気だな。」

「あつ、それは思いつきさ。もう全然そんなことをする気は無い」
「適当にごまかす。」

「ちよつと適當すぎたのか、レイは感動したようで。」

「ほんとう？　ほんとに？　私ずつと引きずつてて」

「あー、それは悪いことをしたね。心の底から謝るよ。っていうか、それ僕の偽者か何かと言ったことだよ。魔法で化けていたんじゃないかな」

「冗談でも、嬉しい」

「とりあえず、状況は良くなった。」

マリモ（裏）の言っていた、世界崩壊を止める方法ってこれだけじゃないはずだ。

んー、これからレイと共に行動しなくちゃいけない気がするな。

…。

その後、レイはレイのした業について話した。

「やっぱりね。それは分かっていたけど、そんなことがあったのか」

「それより、あれは本当に偽者？」

「信じて欲しい」

僕たちは、そう言つて和解した。

これで、一つの障害はクリアしたということ。それにしても、レイが見た偽者つて、ずいぶん前から魔法使いの間で噂になっていた（デスメーター）じゃないかな。

確信は持てないけど。そんな大きな組織のようなものが関係している気がする。

これと言つて、証拠も無い今は、魔法に頼るしかない。

「一つだけ確かなことがある。『あの日の出来事』にはまだ秘密がある。それだけは確かだ。」

第四話 拡散の魔方陣（後書き）

地道に書いて、やっと四話。本当に時間は無駄にできないな。

第五話 勇気ある者とグランデック魔方陣

あれから、すでに三日経った。どうやら、タイムリミットは長引いたらしい。

それにしても、レイチャラー・グラムの見た僕の偽者の正体は、デスマーターだと確信できる。

ところで、僕は今部屋にいるのだが、何故かグラムが後ろに居る。ゾンビなのに若々しい顔でにっこりとこっちを見つめているのだ。

正直、気味が悪い。

「おい、どうした？」

「愛しているのよ」

大丈夫か、グラム。

「はあ？」

もう、相手にしないで。

それより、考えるべきことが山ほどある、今まで見たいにのんきにして入られない。

何を考えているかと言うと、どの魔方陣が一番この状況を解き明かすのに最適かということ。

「ったく、それよりマリモ知らないか？」

あいつ、魂を奪われて少しは体力がないはずなのに、裏の人格のおかげで相変わらず元気みたいだ。

グラムも僕といてほっとしているのか、のんきだ。

どいつもこいつも。

僕は、ふとテレビを見つけた。随分前から、知っていたものだ。魔法で未来をのぞくことができたから。

気になったので、僕はリモコンで起動させた。

『謎の時計盤が上空に見えます。これは一体どういうことでしょう。この東京一体が、孤立した状態です。外部に連絡も通じません。私

達はどうなってしまうのでしょうか」

『もしかしたら、不思議な力がこの世界に存在しているのでは？』

『それより、宇宙人かもしれないよ。これは大発見だ』

…。

…。

最後の人、のんきだ。

テレビをしばらく見ていたが、相変わらず東京が孤立していることぐらいしか分からないな。

「ふあああ」

最近あまり寝ていないので、目の下にクマができた。

「なー、グラムまたはレイ。お前の魔方陣でこの状況を解析することはできないのか。お前なら、どんな凄い魔法でも不死だから使えるだろ」

「ん？ それはね。いいけど、何が目的なの」

「そうだな…、これをボードゲームだと考えて…、戦況を教えるもらうとか」

一応、これでも大丈夫だから候補の一つを言った。

グラムは、早速魔方陣を書いた。でも、これは普通の魔方陣ではないようだ。

恐らく、これはグランデック魔方陣。

これは、一万年後の未来で獲得された究極の魔方陣だ。

「私は、未来のあらゆることを体験している。だから、こういうのも分からないわけ無いでしょ」

自信満々に、グラムは言った。

とりあえず、普通の魔方陣よりは効果が期待できそうだ。

「こついう、戦況とかって。かなり正しくないと、結果が期待でき

ないから」

ふーんと、僕は眺めていると、早速魂を挿入したようだ。

『この戦いの勝敗はすでにおおよそ見えている。しかし唯一の正解が存在する』

魔方陣が語りかけてくる。

『この戦いのポイントは勇氣……。どんな勝負でも勝敗を握るのは、危険を承知で進む強さ。その強さが、備わっている人間は、ファウン（F）だけ』

…。

…。

しばらく、魔方陣は何を言わない。

『すべては、神の意志で動く。戦況は無い。その中でも言えるのは、最後のファウンの勇氣である。具体的に言うなら、デスマーターには勝てないが最後にチャンスが来る』

その後、魂の持続時間が切れた。普通の人間の命なら1000年分だ。見たところ、グラムは恐ろしい奴だ。

それよりも、驚くべきことはデスマーターが存在することをほのめかしたことだ。

結局、デスマーターの正体は教えてくれなかったが、今までのことから、戦略的陰謀を仕掛ける組織のようだ。

それによって、世界を崩壊させる。

シンプルな奴らだ。

それでも、神の意志が関係していることも驚きだ。最終的に神についてもさっぱり理解しようが無い。

「レイよ、どう思う？ 死人として」

「その通りだけど、最後の言葉むかつくわね」

「いいから」

「えーと。どうせなら思い切れてることじゃない？ 特にファウン。あなたはきつと頼りないと思われているんだわ」

…グサツ。

傷ついた。

「しばらく、僕はマリモを探して、もつと有効な情報を得たいので去らば」

「あたしも行く」

こうして、消費した三日間。

しかし、この三日間の過ごし方にも、問題があった。

そのことに気づいたのはもつと後になってからだった。

マリモは、ついに行方不明になった。

いや、もうこの世に存在していなかったのだ。

デスマーターによって。

僕は、自分を追い詰め悔やみながら、旅館の一室へと戻ってきた。そこには、グラムが何故かやばい状況なのに、にっこり笑って立っていた。

「もつ、時間が一日しかない。駄目だ」

『いいえ』小さくそんな声が聞こえた。

グラムはもつと大きな声で言った。

「過去を変えるわ。一緒に時間移動しましょう。私達は魔法使い、それくらい余裕だわ」

過去に戻るなんて、平安の魔法には出来ない。

が…、グラムは未来の最新の魔法を知っている。

そういうことか。

僕は、それに気づいて、立ち上がった。「まー、これは魔法使い

の定めてるところか」

僕は、勇気を振り絞り、戦うべきときのために最善を尽くそうと
硬く心に誓ったのだった。

第五話 勇気ある者と格蘭デック魔方陣（後書き）

魔法使いはタイムトラベルができるのは、知っていますか。例えば、ハリー・ポッターのアズカバンでハーマイオニーが使っていたよね。ってなわけで、これもアリでしょ。見てくれて、本当にありがとう。ライフがゼロになるまで書き続けるから、そのライフが尽きたときが最終回ってことで。

第六話 追憶の世界（前書き）

あらすじ、ファウンとグラムは過去の世界にタイムトリップした。

第六話 追憶の世界

「グラム…。何してるの？」

幼いレイチャラー・グラムは何かをひたすらに書いていた。

「教えられないわ」

「えー、教えてよ」

「仕方ないわね。これが、世界を変える力を持つ魔方陣。ウソっぽくて笑っちゃうかもしれないけど、本当に効果があるのよ」

「ぷっ、信じられないよ」

「笑ったわね（怒り）」

僕は思わず怯えた。それ以来、僕は何故かグラムに対して頭が上がりなくなつた。だから、正直下僕と主の関係だった。

そのせいか、時々グラムは魔法のことを教えてくれた。

ちよつとした、トラウマも多いが、それも思い出である。

ある日、グラムは魔方陣の本当の仕組みについて教えてくれた。

「魔方陣は、風と太陽をイメージして書くのよ」

「風？ 太陽？」

「あなたみたいな間抜けには分からないでしょうから、大体でつかみなさい。世界が、風を意味する。風は何故起きるか。それは太陽熱によるもの…。そういう、大地の循環を基本ベースにするの。でも、やっぱりそれだけじゃ、人が力を借りることはできない、だから…」

(回想終了)

魂を使う…か。

懐かしいな、こうやってグラムと一緒に居るのは。

グラムは、一流の魔法使いであり、僕の師匠だ。

だから、なんとなくその頃を思い出してしまう。

グラムと一緒に過去へと飛んだ。そう、ここは20XX年の僕がここに来た二日後である。

グラムを探しに言っている間に、マリモがどこかへ消えた。ゆえに、世界がやはり崩壊するということで、僕たちはこの世界に真実を求め舞い戻ってきた。

場所は、やはり旅館の裏口。

「マリモが、何故さらわれたかが問題なのか。さらわれないようにすることが問題なのか。どっちだろう」

僕は、自問自答するようにグラムに尋ねた。

「難しいわね。とりあえず、魔法を使っつて言うのはどうだい？」

僕は、仕方がないので、この間役に立った、道しるべとなる魔方陣を使うこととした。

「拡散の魔方陣ね。これは随分と古風なものを使うのね。私なら、もつと効果的なものを選ぶのに」

「いや、実はこれは一部書き換えてある。だから、未来で使われているそこらの魔方陣よりは正確だ」

魔方陣は、新たに発動した。

映像が、浮かんでくるのが、この魔方陣の特徴である。

『るんるん　るんるん』

のんきに外を歩いているマリモ。どうやら、影の人格ではない。

何故か、町を一望できる標高の高い広場にいた。

『この世で、一番美しいのは誰かしら』

そうマリモの後ろでささやいたのは、旅館に居るはずのマリモの母親だった。

『あつ、ママじゃん。どうしたの？』

その時、彼女はナイフで刺され、崖の下にまっ逆さまとなった。

一瞬だけ、声もイメージで伝わってきた。

『私を助けて、ファウン。私、実はいろいろなものに狙われていたの……。とつても辛かった』その言い方は、紛れも無くマリモ（

裏)だった。

僕は、そのイメージから考えられる、解決策を模索した。とりあえず、マリモは昔からいろいろなものに狙われる体質らしい。

今分かるのは、それくらいであり、マリモが普通じゃないのは会った時から分かっていったことである。もしかしたら、運命かとも思うが、それは結果論だと割り切る。

「おい、ミスターアಂಡेटド」ジョークのつもりだった。

その時、グラムは思いつきり、僕の顔をグーパーンチ。

そうして、僕は永眠した。

さよなら。

さよなら。

「つて、死ぬものか！ 本当にすみませんでした」

「謝っても遅い。全く、ファウンは何時からそんなキャラになったんだ？ 前は子供っぽかったのに」

「知らん。あんたがどこかへ行ったせいだろ」

…うーんと。

この話題は、また今度にしよう。

「ゴメンゴメン。殴りすぎちゃったね。それにしても、あんたマリモから好かれてるね。まあ、それよりも…。正直、マリモが後数時間で断崖絶壁から落下してしまうという運命は問題よ」

「ああ、それは理解している。しかし、これはどっちを止めるべきなんだ。マリモの母さんが、マリモの行動か」

「それは、当然どっちもよ。まずは、マリモに定めを教えるしかないわ」

僕達は、こうして、マリモが通るであろう、『笹原元広場』という広場へ向かうことにした。

だけど、本当に、僕は頼りないな。

本当に、勇気あるものになれるのだろうか。しかし僕は、魂をす

り減らし戦うのみ。

向かう道で吹いている風が、ものすごくきついのは、人生と似ている。

そして、きつとその先に希望があると信じていることさえも。

第六話 追憶の世界（後書き）

かっこつけない感じで、魔方阵はクールですよ。魔法カッコイイ。最高。オタクになりそうですね。なーんて、特に詳しいわけではないですが。

第七話 マリモの謎(前書き)

そろそろ、謎が解けていく。

第七話 マリモの謎

マリモを、僕達はようやく見つけた。

そこは、真っ暗で、街灯も少なかった。

「あつ、居た」

僕は、あからさまに言った。それに、マリモも気づいた。

「ん？ なーに、ファウン？」

とりあえず、説明することがある。

前にも言ったように、マリモが殺されるということ。

「お前は、数時間後に殺される。お前の母親にだ」

すると、マリモは突然笑い出した。どうやら、バカにしているようだ。

かなり、不気味だ。

「前にも言ったけど、この世界には秘密が存在しているってことなんだけど。実は、それがこの時間に現われるから。あなたの魔方阵にウソの情報を紛れ込ませたのよ、私」

「は？ どういう」

グラムは、しばらく何も言わない。何となく、知っていたのだろうか。それとも…動揺しているのか。

「あなた…、この世界の創造主じゃ…ないでしょうね」グラムは重い口を開けた。

その質問に、マリモはこう答えた。

「それ、全くなのお門違い。それなら、ここまで不便な世界にはしないでしょう。それに対して正確な答えを返すなら。私は特別な存在。この世界においてたった一人の特異点。そう…どこかのゲームや、アニメにあるそういう存在。ゆえに、この世界に魔方陣形式の魔法が存在することに気づいていたわ。本当は、表の人格を作る必要はなかったのだけれど、例の『デスマーター』通称悪の組織に対抗するためにあえて身を隠していた。しかし、今回の一件はガセ」

僕もいろいろと質問したいことがある。

「なあ、マリモ。お前は どうしてこの時間帯にその何かがあるって分かったんだ？ それが何かを教えてくださいよ」

「見ていれば分かる」

突然、空から雨が降るように、粉のようなものが降ってきた。しかも、その粉が何かを描くように綺麗に並んでいく。「魔法ね」グラムは、断言した。

僕は、その並び方で最悪の魔方阵が描かれていることに気づいた。

「神が、…魂を欲しがっている」

神の逆鱗ゴッドス魔方阵。

「そうです。今、世界は暴走している」真剣なまなざしのマリモ。

ありえない、あの魔方阵はこの世に存在しない物質を代償にしな
いといけない非現実な魔方阵。

これは、タイムトラベルにタキオン粒子が必要なことと同列。

あの、魔方阵は、『死』を代償にして描かれている。
全く逆の性質だ。

「死を代償にできるのは冥界に行った者だけだ」

そうマリモ（表裏）は言った。

「神が、魂を欲しがっているのは何故？」

グラムは、叫ぶように、呟いた。

僕は、マリモが知っていることに気づく。

「教えてくれ、マリモ」

「どうやら、言うしかないようですね。これはもはやすべてを知っているわけではないのですが。神の逆鱗に触れた理由をお話します」

…。
…。

徐々に魔方陣が描かれる。

そんな中、話が始まった。

「あの日…、すべてが壊れました。それは、ファウンさんが私の家に遊びに来ておもしろ半分で魔方陣を書いたことによります。最終的に何の問題も無いように何も起こらなかった魂の一部の吸収」

「それがどういう？」 グラムは問いかける。

「私の魂は、ウルトラレアだといえば分かりますか。中毒性があるんです。あなたたちならお分かりでしょうが、魂の種類はたくさんあるのです。私は、人類にこの先大きな影響を与える、存在だったのです。そこにあなたたちが時を超えてやってきた。それは世界にとって大きな誤算です。もはや、世界も崩壊せざる終えなくなったのですよ。そして、今回の魔方陣が示すように、私の魂を世界が奪いたいと考えている。イワユル、リセットです。神や、仏陀にとっては世界の一つや二つ、どうってことありません。間違えたら作り直せばいい。きっと、魔方陣の存在が、すべてを崩壊へ導いたので。しかし、悔やんでも仕方が無いのですよ。魔方陣は、決して敵ではない。敵は、この世界そのものだった。ようするに勝てばいいんです。死にたくはないでしょう？ 当然、あなたなら、もうすでに分かっているはずでしょう」

そう言って、マリモは、僕を見た。

レイチャラー・グラムはちよっと嫉妬していた。

「ああ、僕は、最後に役に立つ切り札なんだろう？」

「ええ。ところで、今からどうすればいいのかを二つに分けて説明します」

そして、マリモ（表裏）は地面に文字を書いた。

「言っておきたいことが一つ、決してあの日に起こった、魂の吸収を止めてはいけません。それは、神に対する冒瀆であるからです。それをしたら、その時点で世界は滅びるでしょう」

一つ、神の場所を探す。恐らく冥界。

二つ、神に交渉する。

「なあ、神って本当にいるの？ 有り得ないだろ」

僕は、徒然と言った。

「常識的ですね。細かいことは後で説明しますよ」
そう言って、マリモは、その場を去っていった。

…。

……後日。

「デスマーターがどういう存在か、あなた達はまだ分かっていないようですね」ものすごーく、上から視線でマリモは言った。「えーっと、デスマーターはこの世界特有の副産物であります。まあ、他の世界なら飢餓や貧困、災害などさまざまな形であります。この世界ではそういう、元から備わっている特性のようなものとして、デスマーターが居るのですよ。あなたなら分かるでしょう。そして、デスマーターこそ、この世界で倒さなければならぬし、完全に倒してもいけない存在なのです。だから、ほどほどに戦えということですよ」

なーんて、訳の分からないことを、のんびりマリモは言ったのだ。

本当かどうかは、すぐはつきりしたのだが…。

僕が、凡々に冥界へ行く魔方陣を書いていると、手伝いもせず
グラムは、なんか近頃、僕に色目を使ってくる。

全く、状況が分からない。

グラムは、いつもはしっかりしているのに、なんかぼーっとして
いるようだ。

世の中は不思議で一杯だ。大体、神ってなんだよ！ って思っ
ちやうな。

第七話 マリモの謎（後書き）

小説を書くのは、大変です。そんな不条理ありながら、僕は今日も執筆を続ける。

この作品を、どう思いますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7310y/>

魔方陣（ほし）に願いを

2011年11月29日15時48分発行